

タイトル	中央アジアにおける国際貿易の展開
著者	力提甫, 買買提
引用	北海学園大学学園論集, 129: 1-18
発行日	2006-09-25

中央アジアにおける国際貿易の展開

買 買 提 力 提 甫

目 次

- I. はじめに
- II. 中央アジアの地理的範囲とその経済現状
- III. 中央アジアの国際貿易
- IV. 中国と中央アジア諸国の貿易
- V. 新疆と中央アジア諸国の貿易
- VI. 結びにかえて

I. はじめに

中央アジアはユーラシア大陸の中心にあり、ロシアと中国という両大国の「裏庭」で、南からはインドとパキスタン両国の軍事衝突および核競争の陰影の下に置かれている。中央アジアの豊富な天然資源はまた各国の複雑な思惑の的にもなっている。

中央アジアをめぐるのはロシアとイギリスが影響力を争ってきたが、「9.11 事件」以降、アフガニスタン戦争、イラク戦争を経て、アメリカが軍事力で中央アジアに長駆直進した。ロシアは一度中央アジア諸国を切り捨てたが、最近「巻き返し」に乗り出した。中国はまずは経済交流、そして最近では、「上海協力機構」を通じ、政治面で存在感を強めている。

他方、イスラム諸国も、特に、トルコとイランは、関係強化と影響力強化の思惑を顕にしている。EU 諸国、日本、韓国も豊富な天然資源に注目しており、資源開発分野への進出が目立つ。

中央アジアは再び世界戦略の舞台となった。この情勢が中央アジアを含んで、周辺国、アジア、ないし世界の国々の政治状況や経済状況にも大きな変化をもたらすであろう。

このような背景の下に、本稿は中央アジア諸国の経済現状、国際貿易について考察を進めるが、とくに中央アジアとは地理的、歴史的、民族的、宗教的、文化的にもつながりの深い「新疆」¹⁾ウ

1) 歴史上この地域は東トルキスタンと呼ばれていたが、清の征服によって 1884 年に、新たに征服された土地と

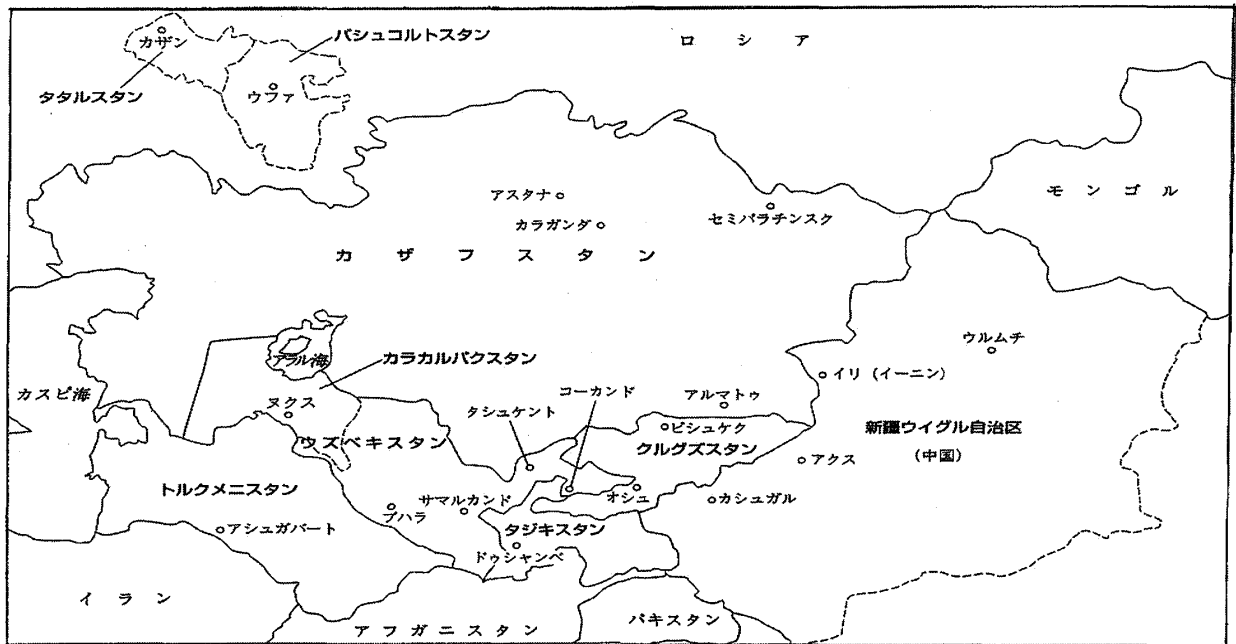
イグル地域との間で、最近急速に進展してきた国際貿易に焦点をあてて、経済協力関係を究明し、その展望を探りたい。

II. 中央アジアの地理的範囲とその経済現状

中央アジアの地理的範囲については、長沢和俊氏の次のような指摘が妥当なものであろう。「アジアのほとんど真ん中に、高さ四千メートル以上のパミール高原があります。文字通りの世界の屋根です。ここから西へは、アライ山脈とヒンドゥー・クシュ山脈が延び、東へは天山山脈とカラコルム山脈、クンルン山脈、そして雄大なヒマラヤ山脈が延びています。このうち、アライ山脈とヒンドゥー・クシュ山脈に囲まれた西トルキスタンと、天山山脈とクンルン山脈に囲まれた東トルキスタンを中央アジアと呼んでいます」²⁾。

これによると、1991年に旧ソ連から独立した中央アジア5カ国と現在の「新疆」ウイグル自治区が中央アジアの範囲に入る。地図で表すと、以下のようになる。

●中央アジア概略図



出所：宇山智彦編集『中央アジアを知るための60章』、明石書店、2005年2月、2～3頁から引用。

という意味で「新疆省」と名づけられた。清朝が滅び、1912年に中華民国が誕生したが、この地は軍閥の混戦に陥り、1942年まで中華民国の統治が及ばなかった。1933年に東トルキスタン・イスラム共和国が成立したが、短期間で崩壊した。1944年にはウイグル族、カザフ族、キルギス族を中心とした民族解放運動によって、グルジャにイリ、アルタイ、タルバガタイ三地方を含む東トルキスタン共和国が成立したが、1949年の中華人民共和国の成立に際して、新政府に併合された。1955年に、この地は中国2番目の自治区（内蒙古に次ぐ）として「新疆ウイグル自治区」となり、現在「新疆」と呼ばれている。

2) 長沢和俊『シルクロード・幻の王国』日本放送出版協会、昭和55年5月、8頁。

中央アジア5カ国は独立してからも、ロシアとの政治・経済関係が依然として強いが、外交面・貿易面ではロシア依存からの脱却が顕在化している。

カザフスタンは独立するとすぐ急進的な市場経済への改革を推進し、15年から20年の間に、3つの段階に分けて、より完備した市場経済体制を打ち立てることを発展戦略として提起した。第1段階には、国家資産の私有化と企業の民営化を実現し、国内の消費財市場を充実させる。第2段階には、改革によって国民経済構造を合理化し、各種の要素市場を創設する。第3段階には、対外型経済の発展を速め、次第に国際経済市場に結びつかせ、工業化国家に仲間入りする。独立してから10年間に、カザフスタンは基本的に資源密集型の輸出発展戦略をとり、主に、石油の採掘、非鉄金属と鉄合金の初級生産を発展させた。輸出はこの戦略の核心である。

カザフスタンには、石油・石炭などのエネルギー資源が豊富にあり、カスピ海東岸・北部の石油資源が世界の注目を集め、現在、カシャガン油田など大規模油田の開発が進められている。農業については、北部及び西部に大穀倉地帯が広がっていて、小麦は輸出余剰能力を有している。ソ連崩壊後の影響で苦しい状況が続いたが、民営化などを中心とする経済改革や油田開発により、インフレが沈静化するなど、マクロ経済面での成果が現れ、1996年に、初めてプラス成長を記録した。98年にはロシアの金融危機により、いったんマイナス成長（前年比-1.9%）に転じたが、99年4月に変動為替制を導入し、石油をはじめとする国際資源市場の回復と穀物の豊作に助けられ、成長率は1.7%に回復した（表1）。以降、2003年まで10%前後の高い成長率で経済は好調を維持し、「経済移行国」から脱し、「市場経済国」として国際経済への統合を目指している。最近ではアメリカに「市場経済国」として認められた。

ウズベキスタンは急進的な経済改革路線と一線を画し、国家による経済管理の下で「漸進主義」路線をとり、同時に政治安定を重視する路線をとりながら、経済発展の効率を社会保障と社会公平に結びつかせる市場経済への段階的移行を戦略目標にしている。具体的には、段階的に市場経済に移行し、多種の経済類型を形成し、企業と国民のために広範な経済自由を与え、改革による経済構造の合理化を実現させる。ウズベキスタンは、自国の実情に基づいて、資源の輸出を補足的なものに、輸入代替型の経済発展戦略を主として、次第に食品、エネルギーの供給問題を解決し、経済構造を調整し、生産加工能力と製品の質を高めることにより、中央アジア5カ国の中で

表1. 中央アジア5カ国の国内総生産の実質成長率

	92年	93年	94年	95年	96年	97年	98年	99年	00年	01年	02年	03年
カザフスタン	-13.0	-9.6	-12.6	-8.2	0.5	1.7	-1.9	1.7	9.6	13.2	9.5	9.4
ウズベキスタン	-11.2	-2.2	-4.2	-1.2	2.0	5.4	4.4	4.4	4.0	4.5	4.2	4.4
キルギス	-15.8	-16.3	-20.1	-5.4	7.1	9.9	2.1	3.7	5.0	5.3	-0.5	5.3
タジキスタン	-30.0	-11.1	-21.5	-12.5	-4.4	1.7	5.3	3.7	8.3	10.2	9.5	8.3
トルクメニスタン	-4.7	-9.8	-18.9	-8.9	-2.4	-11.3	7.0	16.0	17.6	20.5	19.8	16.9

資料：劉洪主編『国際統計年鑑』、中国統計年鑑出版社、1998年版～2001年版、共同通信社編集『世界年鑑』2000年版～2005年版のデータを参考に作成。

は比較的完備した国民経済体系の形成を目指している。

ウズベキスタンは、天然ガス、石油、石炭などのエネルギー資源が豊富にあり、綿花の生産量が年3.5～3.7百万トンで世界5位を占め、金の生産は世界有数の6位で、非鉄金属産業も発達している。他方、ソ連崩壊の影響による生産低下が最も少なく、インフレも穏やかで、96年からGDPの伸びがプラスに転じ、4%以上の成長率を維持している。94年に新通貨「スム」を導入し、2003年10月にIMF8条国に移行し、外貨規制の撤廃を実現した。

キルギスは中央アジア諸国のうち最も急進的な市場経済化への改革を推進してきた。しかし、天然資源に恵まれないため、キルギスは農業の発展を中心として、同時に国境貿易を進展させることを戦略にしている。具体的には、農業・牧畜業の発展に力を入れ、国民の衣食提供を保障し、同時に国家の力によって良好な経済環境づくりに努め、外国資金の導入を利用して本国の経済的発展を図っている。

キルギスの主要産業は農業と牧畜業がGDPの4割を占め、農畜産物を加工する食品加工業、金採掘を中心とする鉱業がある。ソ連崩壊の混乱の中で経済不振が続いたが、96年に初めてGDPがプラスに転じた。98年に、ロシア金融危機の影響を受け、財政が逼迫する危機にあったが、2002年のマイナス成長を除いて、2003年までプラス成長が維持されてきた。

タジキスタンは独立以来、反政府勢力との内戦が6年間も続き、生産水準全般が低下し、経済停滞、国民の衣食問題に直面している。しかも、経済改革がうまくいかず、最終的に急進的な市場経済改革への路を選んだ。政府は、まず柔軟かつ有効な国家経済管理体制と社会安定システムの構築、徹底的な経済改革、既存の生産力の十分な発揮、外国融資の積極的な導入を緊急課題とした。

タジキスタンは、石油や天然ガスなどのエネルギー資源と鉱産資源が豊富で、亜鉛、スズ、ウラン、ラジウムなどの希有金属を有している。綿花をはじめとする農業と牧畜業が産業の中心で、工業部門では、アルミニウムの生成、加工があり、繊維産業が比較的発達しており、化学工業も重要な部門である。ソ連崩壊後、内戦により深刻な経済停滞に悩まされてきたが、97年にGDPがプラス成長に転じ、2003年まで高成長を維持している。

トルクメニスタンは、社会安定と経済発展を図る「漸進主義」で市場経済化への改革を進めている。戦略目標としては、遅れている状況を変えて、経済実力と社会実力を蓄え、近年中に世界先進国に入る。そのために、資源密集型の輸出戦略をとり、石油・天然ガスの採掘と綿花生産を主幹産業として強力に発展させた。同時に、連年の穀物の豊作に助けられ、食品加工業と紡績業の発展に注意を払って、しだいに輸入の依存を低下させた。また、「積極的中立」と呼ぶ外交方針と掲げ、1995年12月の国連総会で、「永世中立国」としての地位が認められた。独立してから、生産力の低下が比較的小さく、98年にGDPがプラス成長に転じ、5カ国の中で二桁という最も高い成長率を見せている。

総じて、「ソ連崩壊」後、中央アジア5カ国は独立を勝ち取ったが、経済破綻と社会不安に遭遇

し、特に、1992年から1995年まで、GDPが大幅に減少し、深刻な景気後退に見舞われた。カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンのGDPは、1991年の規模からそれぞれ43.3%、57.6%、75.1%、42.3%も減少した。これに対して、ウズベキスタンのGDPの減少幅は18.8%に止まった。1996年～1997年頃を境に、ソ連崩壊直後の混乱期を脱し、各国の経済は穏やかな回復を見せ、1999年から安定的成長期に入った。

中央アジア諸国の経済回復は主に工業生産のプラス成長によって実現されている(表2)。1999年から安定成長に入ったのも、強い工業成長に牽引されているからである。例えば、1999年～2000年に、各国の工業部門の生産増加スピードが普遍的に1998年同期のGDP成長スピードを超えている。中央アジア諸国の工業生産高の増加は主に鉱業と加工業の生産増加によって実現されている。

貿易、エネルギー、水、環境問題などから、中央アジア諸国では緊密な協力関係の構築が緊急課題となった。1994年1月のカザフスタン、ウズベキスタンによって創設された統一経済圏に、キルギス(94年4月)、タジキスタン(98年3月)の加盟を経て、〈中央アジア経済共同体〉と改称され、さらに2001年12月には〈中央アジア地域協力機構〉という名称に改められた。2004年5月には、ロシアを新規メンバーとして迎えている。

III. 中央アジアの国際貿易

他方、貿易や外国投資の受け入れなどを通じた諸外国との経済関係の構築は、国家自立を目指す中央アジア諸国にとってきわめて重大な課題である。そのために、中央アジア諸国は計画経済体制下の需給関係を市場経済における通常の独立諸国間の貿易、投資関係に再編し、新しい経済関係の構築に力を入れている。岩崎一郎『中央アジア体制移行経済の制度分析』91頁の表3.3をみると、最近の貿易関係において、中央アジア諸国はCIS諸国との依存関係が徐々に弱まっている。1992年のCIS諸国との貿易依存度と比較すると、カザフスタンは65.3%から1997年には48.5%へ下がり、キルギス、タジキスタンはそれぞれ79.8%、52.2%から1998年には49.5%、49.6%に減少した。ウズベキスタン及びトルクメニスタンでは逆にそれぞれ44.7%、42.1%から

表2. 中央アジア諸国の総工業生産の推移(1991～2001年) (%)

年次	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001
カザフスタン	-0.9	-13.8	-14.8	-28.1	-8.2	0.3	4.0	-2.4	2.7	14.6	13.5
ウズベキスタン	1.5	-6.7	3.6	1.6	0.1	2.6	6.5	5.8	6.1	3.5	4.5
キルギスタン	-0.3	-26.4	-25.3	-28.0	-17.8	8.8	39.7	5.3	-4.2	7.1	5.4
タジキスタン	-3.6	-24.3	-7.8	-25.4	-13.6	-23.9	-2.0	8.2	5.6	9.9	14.8
トルクメニスタン	4.8	-14.9	4.0	-24.7	-6.4	17.9	-33.0	25.8	13.0	29.0	11.0

資料1) 岩崎一郎『中央アジア体制移行経済の制度分析』東京大学出版社、2004年11月、84頁表3.1のデータを参考に作成。原注：トルクメニスタンの97、98年の数値がEBRD推計値。

資料2) 1997年～2001年のデータは宇山智彦『中央アジアを知るための60章』明石書店、2003年3月、262頁表1のデータを引用した。

1993年には61.1%、57.8%へ上昇した。しかしその後、ウズベキスタンでは1995年に40%へ、トルクメニスタンは1998年に39.3%へと減っている。カザフスタン、キルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタンの4カ国の貿易相手国は2000年前半までに、それぞれ100を超えている。

表3から1992年と2002年との貿易総額、輸出、輸入を比較して見ると、カザフスタンが2.3倍、2.7倍、1.9倍、キルギスが1.5倍、1.6倍、1.4倍、タジキスタンが2.9倍、3.6倍、2.4倍、ウズベキスタンが2倍、2.2倍、1.8倍、トルクメニスタンは1.8倍、1.6倍、2.2倍に拡大した。

中央アジア諸国の貿易相手国が多様化され、CIS域外へのシフトは明らかである。しかし、ロシア、ウクライナ、アゼルバイジャンなどCIS諸国との貿易がいまだに重要である。特に、カザフスタンが他の中央アジア4カ国間にとって貿易相手国としての役割が大きくなっている。この中で、ウズベキスタンが最もCIS域外への貿易を急速に増加させ、EU、米国、トルコ、ないし韓国との貿易を重視している。この傾向が他の中央アジア諸国に見られるが、カザフスタンにとっては、中国が重要な貿易パートナーである。キルギスにとっては、CIS域外ではドイツ、中国が重要である。タジキスタンにとっては、スイス、イラン、トルクメニスタンにとってイラン、トルコが重要なパートナーである(表4)。

表3. 中央アジア5カ国の貿易額の推移

(百万ドル)

	1992			1994			1998			2002		
	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入
カザフスタン												
全体	7,054	3,630	3,424	7,730	3,231	4,499	9,786	5,436	4,350	16,200	9,709	6,491
CIS外	2,450	1,489	961	2,741	1,357	1,384	5,556	3,266	2,290	10,946	7,486	3,460
CIS	4,604	2,141	2,463	4,989	1,874	3,115	4,230	2,170	2,060	5,254	2,223	3,031
ウズベキスタン												
全体	3,253	1,497	1,756	5,522	3,044	2,478	6,343	3,218	3,125	6,402	3,265	3,137
CIS外	1,798	869	929	2,102	966	1,136	4,681	2,425	2,256	4,118	2,148	1,970
CIS	1,455	628	827	3,420	2,078	1,343	1,662	793	869	2,284	1,117	1,167
キルギス												
全体	727	313	414	709	340	369	1,355	514	842	1,072	486	587
CIS外	147	77	70	225	117	108	684	283	401	581	317	264
CIS	580	236	344	484	223	261	671	231	441	491	169	323
タジキスタン												
全体	508	204	304	1,312	413	899	1,308	597	711	1,458	737	721
CIS外	243	111	132	638	320	318	659	394	265	722	549	173
CIS	265	93	172	674	93	581	649	203	446	736	188	548
トルクメニスタン												
全体	2,714	1,761	953	2,905	2,010	894	1,602	594	1,008	4,975	2,856	2,119
CIS外	1,688	1,145	543	751	416	335	972	442	530	2,736	1,371	1,378
CIS	1,026	616	410	2,153	1,594	559	630	152	478	2,239	1,485	742

資料：岩崎一郎等編集『現代中央アジア論』、日本評論社、2004年8月、255頁表10.1のデータを引用。

注1) 92年の数値が岩崎一郎『中央アジア体制移行経済の制度分析』、東京大学出版会、2004年11月、90～91頁の表3.3のデータを参考に計算した。

注2) 2002年の欄に示されているデータは2001年のもの。同『現代中央アジア論』表10.1の注1)を参照。

表 4. 中央アジア諸国の主な貿易相手国との貿易, 1998 年 (%)

	輸出先	輸出	輸入先	輸入
カザフスタン	ロシア	29.1	ロシア	39.4
	イギリス	9	ドイツ	8.6
	中国	7.3	米国	6.3
	ドイツ	5.3	イギリス	5
	ウクライナ	5	トルコ	4.8
ウズベキスタン	輸出先	輸出	輸入先	輸入
	ロシア	14.9	ロシア	16
	スイス	10.3	韓国	11.4
	イギリス	10	ドイツ	8.4
	ベルギー	4.2	米国	7.4
カザフスタン	3.5	トルコ	6	
キルギス	輸出先	輸出	輸入先	輸入
	ドイツ	37.4	ロシア	24.2
	カザフスタン	16.7	ウズベキスタン	14.5
	ロシア	16.3	カザフスタン	8.9
	ウズベキスタン	7.5	ドイツ	6.3
中国	3.1	中国	5.3	
タジキスタン	輸出先	輸出	輸入先	輸入
	オランダ	37	ウズベキスタン	39
	ウズベキスタン	21.9	スイス	15.2
	スイス	15.9	ロシア	14.3
	ロシア	8	カザフスタン	7.3
イラン	2.3	リヒテンシュタイン	7.1	
トルクメニスタン	輸出先	輸出	輸入先	輸入
	イラン	24.1	ウクライナ	16.1
	トルコ	18.3	トルコ	13.1
	アゼルバイジャン	6.9	ロシア	11.6
	ロシア	4.7	ドイツ	6.9
タジキスタン	4.5	米国	6.4	

資料：橋田坦編集『中央アジア諸国の開発戦略』，勁草書房，2000年11月，205頁付表A引用。

主要輸出品目としては、カザフスタンでは石油・鉱物、金属製品、農産物、ウズベキスタンでは綿花、エネルギー、サービス、キルギスでは黄金、綿花、電力、タジキスタンでは非鉄金属、紡績製品、鉱物・電力、トルクメニスタンでは天然ガス、石油製品、綿花が重要である。諸国の主要輸入品目がそれぞれ機械類、輸送機械、化学製品、食品などに集中している。(表5)

IV. 中国と中央アジア諸国の貿易

1950年代から中国は中央アジア諸国を含むソ連と政治、経済、軍事、貿易において、非常に緊密な関係にあった。その象徴として、中国はソ連から資本・技術・ノウハウなどの援助を受けたエネルギー・軍事産業・機械製造・冶金・化学工業からなる156件の大型企業プロジェクトを中心とする工業開発を急ピッチで展開させ、短期間に国民経済を回復した。しかし、1960年代の中

表5. 中央アジア5カ国の貿易構造

(億ドル/%)

カザフスタン	1997年	ウズベキスタン	1999年	キルギス	2002年
輸出総額	106.4	輸出総額	43.8	輸出総額	4.86
鉱物	35.0%	綿花	36.0%	黄金	33.4%
金属及び製品	34.0%	エネルギー	12.0%	綿花	9.3%
食品及び原料	12.0%	サービス	8.2%	電力	4.5%
化学製品	9.0%	機械設備	6.3%	タバコ及び製品	4.0%
機械・設備	5.0%	非鉄金属・鉄化合物	4.6%	毛皮	3.9%
輸入総額	42.75	輸入総額	45.3	輸入総額	5.87
燃料・鉱物	27.0%	機械設備	45.9%	石油製品	13.6%
食品原料	11.0%	食品	19.3%	天然ガス	7.1%
化学製品	10.0%	化学製品・プラスチック製品	12.5%	薬品	4.5%
		非鉄金属・鉄化合物	7.5%	服装・アクセサリ	3.0%
		サービス	7.5%	石炭	2.3%
タジキスタン	2003年	トルクメニスタン	92~01年		
輸出総額	7.98	輸出総額	158.9		
非鉄金属	54.6%	天然ガス	54.0%		
紡績原料・製品	29.0%	原油・石油製品	20.0%		
鉱物・電力	7.5%	綿花・綿糸	15.6%		
運輸機械・機械設備	1.5%	紡績製品	4.0%		
		電力	2.0%		
輸入総額	8.81	輸入総額	123.5		
化学製品	33.2%	機械設備	26.0%		
鉱物・天然ガス・電力	24.8%	食品	16.0%		
運輸機械・機械設備	16.0%	金属及び製品	10.6%		
植物製品	4.2%	運輸機械及び部品	10.0%		
		電子通信機器	8.2%		

資料：『新疆経済網』，http://www.xjjb.com/zywgg1/2005-07/13/content_38939.jsp のデータを整理して作成。

ソ対立と1962年の「イリ事件」³⁾によって、国境が閉鎖され、往来が途絶えた。

1970年代後半、中国において「文化大革命」が終息し、「対外改革・対外開放」政策が実施された。中ソ関係の修復により、80年代半ばから国境が再開され、貿易や人的往来が復活した。特に、ソ連崩壊後、中央アジア諸国が独立すると、その軍事的・経済的戦略位置が世界の国々の注目を集め、中国は有利な地理位置を利用して、他の国々よりいち早く中央アジア諸国に進出した。他方、中央アジア諸国も中国に急接近した。

その背景を以下のように整理できる。中国は国土が広いが、人口が多く(13億)、さらに深刻な資源不足に直面している。資源分布からみれば、中国東部の資源は西部よりはるかに欠乏しており、他方、西部の資源は国の経済発展ニーズに応えることができない。中国の自然資源に対する長期的需要と、中央アジア諸国の資源開発の外資参入に対する強い要望が、双方の経済、貿易、技術などの領域において、大きな刺激を与える。

3) 1960年代、中ソ論争により中ソ間の対立が顕在化するにつれ、新疆における中ソ国境も緊張化した。62年、ウイグル人、カザフ人など数万人(一説10数万)が家畜を連れてソ連領へ越境した事件。これは、また両国関係の悪化の理由のひとつとなった。

一方、中央アジア5カ国の国土面積は399.5万km²もあり、人口は既に5000万を超え、2003年に5700万に達した。現在の人口自然増加率と生育促進政策によって、2030年に人口は1億に達すると予測され、この地域は一つの大市場を形成しつつある。しかし、過度な特化によって、中央アジア諸国は重工業が発達し、軽工業が遅れ、経済構造が畸形に形成されている。例えば、鋼材、化学肥料、大型機械製品などが多く余り、食料品、肉類、日常用品、家電製品、原材料などが不足している。生産設備は旧く、設備更新と技術更新のための外資が必要である。加えて、中央アジア諸国は区域外の国々に目を向けて、新しい市場を探さなければならない。

中国は開放改革政策を実施してから、従来のソ連型の経済発展モデルからの脱皮を図って、重工業重視の方針を変え、軽工業の発展に力を入れ、家電製品、紡績業、服装、食品加工、日用製品などの軽工業を発展させた。今は、軽工業製品の種類が多く、質も高くなり、かつ値段が安く、ちょうど中央アジア諸国の一般国民の消費水準に適應している。一方、中国は、中央アジア諸国の石油、石炭、非鉄金属、鉄合金などの鉱物原料、綿花、毛皮などの農畜産品を必要としている。つまり、このような貿易は双方にとって非常に有利で、補完性が強い。

中央アジア諸国が独立してから、相次ぐ一連の優遇政策を打ち出し、民間人と企業の対中国貿易を奨励してきた。1992年には、中央アジア諸国と中国との貿易総額は4.64億ドルで、1990年より10倍に拡大した。その中、カザフスタンと中国との貿易総額が3.7億ドルに達し、中国はカザフスタンの対外貿易総額の20%を占め、第1位となった。他に、ウズベキスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンと中国との貿易額がそれぞれ5,252万ドル、3,549万ドル、450万ドル、276万ドルに達した⁴⁾。1992年貿易額を基準にしてみると、2003年に、中国・カザフスタン間が8.9倍、中国・ウズベキスタン間が6.6倍、中国・キルギス間が8.9倍、中国・タジキスタン間が8.6倍、中国・トルクメニスタン間が30倍に増えた（表6も参照）。

中国の経済発展に必要とする45種の主要な鉱物資源が、2010年に需要を満たすことのできるものが21種、2020年には6種に減少する。石油、天然ガス、石炭、鉄、銅、クロム、カリウムなどが長期的に不足する⁵⁾。石油を例にしてみると、中国は1993年に石油輸出国から石油純輸入国

表6. 中国と中央アジア5カ国の貿易

(百万ドル)

	1998			2000			2002			2003		
	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入
カザフスタン	635.5	204.7	430.9	1,557	598.8	958.2	1,954.7	600.1	1,354.6	3,286	1,565	1,721
ウズベキスタン	90.3	57.9	32.4	51.5	39.4	12.0	131.8	104.4	27.4	347.1	146.8	200.3
キルギス	198.1	172.4	25.7	177.6	110.2	67.4	201.9	146.2	55.7	314.3	245.2	69.1
タジキスタン	19.2	11.0	8.2	17.2	6.8	10.4	123.9	65.0	58.9	38.8	20.8	18.0
トルクメニスタン	12.5	10.3	2.2	16.2	12.1	4.1	87.5	86.8	0.7	82.9	78.8	4.1

資料：『中国対外経済貿易年鑑』中国対外経済貿易出版社、99/00年、01年、03年、04年のデータを参考して作成。

4) 『中国対外経済貿易年鑑』1993/94年版、450～451頁。

5) 王海燕「哈薩克斯坦与中国新疆的地緣經濟合作」、『新疆社会科学』、2002年第1期、49頁。

に転じ、1994年に原油及び石油製品を2525万トン輸入したが、2003年にその輸入は約1.2億トンに達し⁶⁾、約5倍に達した。石油不足は中国の経済発展を制約してますます厳しくなるのはいうまでもない。一方、中央アジア諸国は豊富なエネルギー資源と鉱物資源を持っている。カザフスタンの鉱物資源価値が8.7兆米ドルで、世界埋蔵量において、銅が10%、鉛が19%、亜鉛が13%、鉄が10%、マンガンが25%、クロム鉄鉱が30%を占め、ウランが世界4位、黄金が1位で、石油が30億トンある。ウズベキスタンの資源の価値が3.5兆米ドルで、黄金が世界4位、ウランが7位を占め、石炭が20億トン、天然ガスが2兆m³ある。キルギスのアンチモン生産が世界3位で、豊富な水銀、錫と水力資源を有している。タジキスタンのウラン、鉛、亜鉛、ボーキサイトが世界に重要な地位を占める。トルクメニスタンの天然ガスと石油埋蔵量が21兆m³、120億トンで、天然ガスの埋蔵量が世界3位を占める⁷⁾。他方、中央アジア諸国は人口が少なく、資源の消費も少なく、それに自国の鉱物資源とエネルギー資源の輸出を中長期的な発展戦略にしている。このことは、中国に不足している、あるいは中長期的に需要を満たすことのできない石油、鉄、銅、ウラン、クロム、天然ガスなどの鉱物資源とエネルギー資源を中央アジア諸国から補充しうることを意味する。中国は中央アジア諸国と地理的に近く、新疆を経由する交通条件が整っているため、中央アジア諸国の重要な経済協力パートナーとなりつつあり、このような相互の需要関係はますます深化している。

今は、中国と中央アジア諸国は貿易以外にも、技術貿易、労務協力、プロジェクトの請負などの分野で互いの経済関係を強めている。中央アジア諸国は対中国の貿易を新疆からすでに中国の西北部、ないし内陸部及び沿海部まで延伸し、中国の20数省と貿易関係を持っている。中国も対中央アジア諸国の貿易を仲介に東欧、西アジアおよび中近東まで関係を伸ばしている。

特に、〈上海ファイブ〉がウズベキスタンの加盟によって、2001年6月に〈上海協力機構〉に変身したので、中国と中央アジア諸国との協力範囲は、国境画定から政治、安全保障、経済・貿易、科学技術、文化、教育、エネルギー、交通、環境保護などの領域まで拡大されつつある。

V. 新疆と中央アジア諸国の貿易

「新疆」と中央アジア5カ国はシルクロードの中間部に位置し、2000年にわたって、東西交通の要衝と東西貿易の中継地であった。大航海時代以降、海洋航路が東西貿易の根本的な交通基幹となり、内陸部を通るシルクロードは衰退したが、ペルシャ、ブハラ、サマルカンド、タシケント、ないしインド、アフガニスタンの商人やウイグルの商人が引き続きこの道を往来していた。すなわち、中央アジア諸国にとってはこの道は中国大陸や、インド、アフガニスタンと貿易するために最も便利な道である。それゆえ、17～19世紀に、ロシアと清朝の征服にもかかわらず、中央ア

6) 同3), 504頁。『中国商務年鑑』2004年版, 547頁。

7) 同5)。

表7. 新疆対ロシア輸出入金額⁸⁾（銀/万両）

年次	項目	鎮迪道	伊塔道	阿克蘇道	喀什道	合計
1905	輸入	42.7	83.5	3.3	107.3	236.8
	輸出	46.6	51.3	2.7	88.9	189.5
1906	輸入	70.7	100.4	4.3	182.6	358.0
	輸出	57.6	53.5	3.8	173.2	288.1

資料：劉彦群等『新疆対外貿易概論』，新疆出版社，1987年4月，19頁を参考に作成。

表8. 新疆対ソ連邦の貿易（万ルーブル）

年次	輸出	輸入	総額	貿易収支
1924-25	436.1	203.3	639.4	232.8
1925-26	933.2	552.8	1,486.0	
1926-27	1,247.2	891.9	2,139.1	355.3
1927-28	1,346.5	940.1	2,286.6	406.4
1928-29	571.2	704.5	1,275.6	△133.3

資料：同表7。20頁を参考に作成。

アジアのオアシス地域と草原地帯を舞台にして、旺盛な交易活動が続いた。例えば、カザフの牧畜商品がロシアへ、ロシアの織物や金属製品がカザフに、さらにアストラハン経由でブハラ、ヒヴァ、ウイグルへ、ウイグルの綿花や、綿糸、綿布とウイグルを経由した中国産の絹織物、茶、大黃がコーカンド、ブハラ、さらにロシアへ輸出され、中国とカザフの絹馬貿易、茶馬貿易も盛んに行われた。

20世紀に入っても、新疆は帝政ロシア、その後のソ連とも、またインド、アフガニスタンとも貿易が停滞なく、続いている（表7～表10、表12）。特に、第二次世界大戦中は、中国沿海部が日本軍に封鎖されており、1937年に中ソ両国が「相互不可侵条約」を締結したのちは、ソ連の対中国援助物質及び中ソ貿易は、その輸送ルートとして中国北西部、新疆～甘肅自動車道路を利用せざるを得なかった（表11）。しかし、1942年にソ連政府と中国（国民党）政府の関係が悪化すると、中国はほとんどソ連に対する往来を中断した。一方、1942年～1944年に、新疆はソ連との貿易が金額として急減したが、輸入と輸出がそれぞれ3,680万ルーブル、8,790万ルーブルで、貿易関係は依然として維持されていた⁹⁾。1945年からは、新疆とソ連の貿易が、主にイリ、タルバガタイ、アルタイなど三地方を中心に行われた（表13）。

1950年代、中ソ友好関係の下に、新疆は石油、石炭、冶金、電力、鉄鋼、トラクタ製造、紡績などの工業建設、専門学校、大学、病院などの設立でソ連の援助を受け、中央アジア諸国と貿易、経済交流を大いに展開していた。中央アジア諸国との貿易が、東欧社会主義諸国を含めて、当時の新疆対外貿易の約5分の4を占めていた。しかし、1960年代の中ソ対立で、経済交流や人的往来が中断された。

新疆と中央アジア諸国との貿易、経済交流はいつも中ソ両大国の政治・経済・外交関係に左右されてきた。この経緯をまとめてみると、新疆と中央アジア諸国との関係が、50年代が上昇、60年代が後退、70年代が停滞、80年代が回復、90年代が調整、上昇というプロセスを辿ってきた。

新疆は80年代後半から早急に外国の技術や投資を導入・利用し、輸出を拡大することを対外貿易の主要任務と定めた。したがって、対外経済貿易体制を改革し、対外経済交流と協力を促進す

8) 注：鎮迪道がウルムチ、伊塔道がイリ、タルバガタイ、阿克蘇道がアクス、喀什道がカシュガルを指す。

9) 劉彦群等『新疆対外貿易概論』，新疆人民出版社，1987年4月，26頁。

表9. 新疆対インド貿易 (万ルピー)

年次	輸出	輸入	総額	収支
1931-32	168.2	54.1	222.3	114.1
1932-33	112.7	61.7	174.4	51.0
1933-34	193.2	43.6	236.8	149.6
1934-35	143.8	70.1	213.9	55.3
1935-36	102.7	98.2	200.9	4.5
1936-37	103.8	124.3	135.1	△ 20.5

資料：同表7。22頁を参考に作成。

表10. 1927年新疆対アフガニスタン貿易 (ルピー)

輸入項目	金額	(%)	輸出項目	金額	(%)
アヘン	67.5	77	綿花	16.8	34.9
山羊皮	10.6	12.1	Cnakas	9.4	19.6
馬皮	4.5	5.1	フェルト	8.0	16.7
狐皮	2.4	2.7	馬	7.5	15.6
生皮	1.0	1.1	磁器	2.1	4.4
ロシア金貨	0.9	1.0	絨毯	1.7	3.5
山猫皮	0.4	0.5	ラッパ	1.3	2.7
外国杏仁	0.4	0.5	生糸	1.2	2.6
合計	87.7	100	合計	48.0	100

資料：同表7。24頁を参考に作成。

表11. 中国未占領区(新疆を除く)対ソ連輸出 (百万ルーブル)

年次	1938	1939	1940	1941
金額	39	63.1	76.6	86.1

資料：同表7。25頁を参考に作成。

表13. 東トルキスタン共和国対ソ連貿易 (百万ルーブル)

年次	輸入	輸出	総額
1946	23.8	23.8	47.6
1947	22.1	22.1	44.2
1948	30.4	30.4	60.8
1949	36.0	36.0	72.0

資料：同表7。27頁を参考に作成。

表12. 新疆対ソ連貿易 (万ルーブル)

年次	輸入	輸出	総額
1937	34.8	25.8	60.6
1938	43.4	35.2	78.6
1939	33.1	41.7	74.8
1940	Na	41.7	
1941	47.1	43.7	90.8

資料：同表7。26頁を参考に作成。

るための環境づくりに努めた。

1990年9月12日に、ウルムチからカザフスタンのアルマトゥまでの鉄道が開通し、中央アジアはアジアとヨーロッパをつなぐ鉄の回廊となり、新疆もまた内陸地区から一躍して中国の西に対する開放の窓口に変身した。新疆は中央アジア諸国に接する3,200 kmの国境線に、相次ぐアラタウ山口、バクト、ホルゴス、ジムナイ、トガルト、アフトベク、ドラタ、ムザルト、イルケシュタムなどの国境税関とウルムチ空港税関、カシュガル空港税関を設立し、域内の高速道路網の整備と運輸網の増強、蘭州～新疆鉄道の複線建設、ウルムチ～アルマトゥ間、カシュガル～ビシケク間の自動車道路、ウルムチ～アルマトゥ間、ウルムチ～タシケント間、ウルムチ～ビシケク間、ウルムチ～ノヴァシビルスク～モスクワ間、ウルムチ～イスラムバード間の国際便の開通により自動車道路、鉄道、航空からなる運輸網を形成した。1991年から1997年にかけて、アラタウ山口鉄道輸出入税関を通過した貨物が累計で、新疆の貨物325万トンと中国他地域の貨物259万トンを含めて633.5万トンに達した。1999年1～7月の貨物通過量が207.5万トンに達し、1998年同期より66.7%増加し、アラタウ山口税関が全国9大鉄道税関の中で第2位に浮上した。1997年4

月1日に、中国は連雲港からアラタウ山口までの貨物越境専用列車を開通し、いまは中央アジア5カ国、または日本、韓国、アメリカ、ドイツなどの十数カ国がこの鉄道を国際貿易の運輸に利用しており、貨物の通過量が2000年に1,000万トン以上に達した。東アジアと中央アジアが新疆を通じて展開されている国際貿易運輸はその規模を拡大している。

こうしたことは、新疆の国際貿易運輸の中継地としての地位を高める一方、新疆と中央アジア諸国との貿易をも急速に進展させた。1992年に、新疆の対カザフスタン貿易が2億ドルを超え、貿易相手国としてカザフスタンが第1位で、キルギスが第2位であった。1991年～1997年の間、新疆と中央アジア5カ国の貿易が年平均47.8%で増加し、累計で35億ドルに達した¹⁰⁾。1998年、新疆の対外貿易が15.32億ドルで、2003年に47.72億ドルに増え、3.1倍に拡大した。その中、中央アジア5カ国との貿易が7.17億ドルから28.48億ドルへと5年間で4倍に拡大し、新疆対外貿易額に占める割合が46.8%から59.7%に上昇した。つまり、中央アジア諸国は新疆にとって最大の貿易パートナーである。

新疆の対外貿易を基準にして、1998年と2003年を比較してみると、カザフスタンとの貿易が4.9億ドルから25.5億ドルへと5.2倍も拡大し、新疆の貿易額に占める割合が32.0%から53.4%に上昇した。貿易額、輸出、輸入でカザフスタンが1位、2位、1位からすべて1位となった。ウズベキスタンとの貿易が2000年に大きく減少したが、その後回復され、0.4億ドルに達し、1998年より52.6%増加し、1998年の28位から8位に浮上した。キルギスとの貿易が1998年に約2億ドルで、その割合が12.7%に達し、貿易額で3位を占めたが、2000年に、1.32億ドルに落ちた。その後徐々に回復し、2.31億に達し、19.4%増加した。貿易額、輸出、輸入で3位、2位、1位から4位、3位、5位に転落したが、貿易額が2.7倍に拡大した。タジキスタンとの貿易も1998年より減少したが、2003年から回復しつつある。トルクメニスタンとの貿易額が12.4倍、輸出額が12倍、輸入額が8倍に拡大し、順位も貿易額で63位から16位、輸出額で59位から10位、輸入額で93位から43位に上昇した。（表14、表15）

表14. 新疆と中央アジア5カ国の貿易

(百万ドル)

	1998			2000			2002			2003		
	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入	総額	輸出	輸入
新疆	1,526	747.8	777.7	2,264	1,204	1,060	2,691.9	1,308.5	1,383.4	4,772	2,542.2	2,229.8
カザフスタン	488.2	160.2	328.0	1,179	508.9	670.5	1,366	442.0	924.0	2,546	1,273	1,273
ウズベキスタン	24.7	24.3	0.4	9.5	5.4	4.1	19.1	17.1	2.0	37.7	8.0	29.7
キルギス	193.4	168.0	25.4	171.4	104.4	67.0	153.9	99.5	54.4	231.0	162.7	68.3
タジキスタン	10.9	4.8	6.1	10.3	5.2	5.1	4.8	1.0	3.8	8.7	3.3	5.4
トルクメニスタン	0.2	0.2	0.0	2.4	0.4	2.0	10.0	9.7	0.3	24.8	24.0	0.8

資料：『新疆統計年鑑』、中国統計出版社、00年、01年、03年、04年版のデータを参考に作成。

10) 王海燕「中国新疆与中亚五国的合作關係」21頁。

表 15. 新疆の貿易相手国上位 7 位 (%)

1998 年						
順位	貿易先	総額	輸出先	輸出	輸入先	輸入
1	カザフスタン	32.0	キルギス	22.5	カザフスタン	42.2
2	米国	14.0	カザフスタン	21.4	米国	22.3
3	キルギス	12.7	香港	15.1	フランス	10.7
4	ロシア	7.8	ロシア	8.6	ロシア	7.1
5	香港	7.5	日本	5.7	ドイツ	3.7
6	フランス	5.5	米国	5.4	キルギス	3.3
7	日本	4.1	ウズベキスタン	3.3	日本	2.5
合計		83.6		82.0		91.8
2003 年						
順位	貿易先	総額	輸出先	輸出	輸入先	輸入
1	カザフスタン	53.4	カザフスタン	50.1	カザフスタン	57.1
2	ロシア	5.8	パキスタン	10.0	ロシア	10
3	パキスタン	5.4	キルギス	6.4	日本	4.9
4	キルギス	4.8	アゼルバイジャン	6.0	米国	4
5	米国	4.1	米国	4.2	キルギス	3.1
6	アゼルバイジャン	3.2	イタリア	3.0	イタリア	3.1
7	日本	3.2	香港	2.8	ドイツ	2.6
合計		79.9		82.5		84.8

資料：『新疆統計年鑑』，中国統計年鑑出版社，2000 年，2004 年のデータを整理して作成。

このように、新疆と中央アジア諸国の貿易は急速に発展してきた。その主な要因としては、新疆と中央アジア諸国の貿易方式が、国際的な貿易方法以外に、定期的な国境市場、展示会、商談会(1990 年から毎年行うウルムチ商談会)、観光、家族訪問ショッピングなど多様化された国境貿易の急増である。国境貿易は新疆と中央アジア諸国にとって、地縁で最も便利で、直接的な貿易方式である。2003 年に、国境貿易額、輸出額が新疆対外貿易総額、輸出総額に占める割合がそれぞれ 1998 年の 56.8%、46.5%から 63.7%、63.1%に上って、輸入額も 60%以上を維持している。新疆対外貿易が 1998 年より 3.1 倍も拡大したのも、国境貿易が 3.5 倍に増えたからである(表 16)。この国境貿易を支えているのは、新疆の 13 主要民族の中に 10 民族と中央アジア諸国の主要民族が互いに国境をまたがって居住し、言語が通じ、親戚が多く、宗教、生活習慣が同様で、互い信頼でき、人的往来と貿易交流が長いからである。

新疆は中央アジア諸国に最初、食糧、食油、アルコール、お土産、服装、靴・帽子を輸出したが、最近では革製品、ペンキ、冷蔵庫、洗濯機、OA 化用品、薬品、医療機器、石油化学製品、小型トラクタ、綿花加工設備、農業機械、食品加工設備、製紙設備、包装機械などを増やした。中央アジア諸国は新疆に最初、化学肥料、鋼材、木材、綿花、トラック、大型トラクタ、ブルドーザ、ショベルカーなどを輸出したが、最近では電解銅、アルミニウム、水銀、クロム、鉄鉱石、銑鉄、石油、ベアリング、化学製品、機械製品などが増えている。

新疆の対外貿易が中国対外貿易に占める割合は 0.6% (03 年) に過ぎないが、中央アジア諸国の

表 16. 新疆の国境貿易の推移
(百万ドル/%)

	1998年	2000年	2002年	2003年
貿易額	869.5	1,319.7	1,543.7	3,039.2
割合	56.8	58.3	57.4	63.7
輸出	376.0	580.2	472.2	1,604.1
割合	46.5	48.2	36.1	63.1
輸入	493.5	739.5	1,071.5	1,435.1
割合	68.2	70.0	77.5	64.4

資料：『中国対外経済貿易年鑑』99/00, 01, 03年版、
『中国商務年鑑』04年版のデータを整理して作成。

対外貿易総額に占める割合が15.9%に達する。つまり、中央アジア諸国にとっては、新疆は無視できない存在である。

近年来、新疆と中央アジア諸国の経済関係がしだいに農業、牧畜業、林業、重工業、バイオテクノロジー、エネルギー、軽工業、食品工業、地震、医療、教育などの国民経済の各分野に拡大されている。

21世紀に入り、新疆と中央アジア諸国との各分野で相互依存関係がさらに強められ、双方の経済発展を大きく促進しており、「新シルクロード経済圏」を形成しつつある。こうしたことは、双方の経済構造と国民経済の発展水準、ないしアジア地域の経済にも影響を及ぼす。地理的に、この地域の協力関係は他の地域に代替できないものがあるであろう。

VI. 結びにかえて

しかし、この地域の経済現状から見ると、まだいくつかの問題が残されている。一つは、経済発展水準が低い。例えば、2004年の一人当たりGDPでは、カザフスタンが1,780ドル、ウズベキスタンが420ドル、キルギスが330ドル、タジキスタンが190ドル、トルクメニスタンが1,120ドル¹¹⁾、中国は1,100ドル、新疆は1,173ドルである。国連の1996年の区分によれば、一人当たりGDPで765ドル以下が低収入、765～3,035ドルの間が中下収入、3,036～9,385ドルの間及び9,386ドル以上が中上収入、高収入国家となる。カザフスタン、トルクメニスタン、新疆、中国が中下収入の範囲にぎりぎり入るが、ウズベキスタン、キルギス、タジキスタンが低収入国家に属する。

二つ目は、経済構造が不均衡である。表17から分かるように、中央アジア諸国の経済構造には旧ソ連時代の影響がいまだに残り、完備した工業体制が形成されていない。カザフスタンを除いて、全体的に農業の割合が依然として大きい。カザフスタンはサービス業が発達しているが、工

11) 2005年6月30日次の <http://secretchina.com/news/gb/articles/5> による (2005年8月26日)。

表 17. 新疆と中央アジア5カ国の産業構造の推移

(百万ドル・%)

	GDP		農 業		工 業		製造業		サービス業	
	90年	01年	90年	01年	90年	01年	90年	01年	90年	01年
カザフスタン	40,304	22,389	27	19	19	18	12	13	52	63
ウズベキスタン	23,673	11,270	33	34	33	23		9	34	43
キルギスタン	2,389	1,525	34	38	36	27	28	8	30	35
タジキスタン	4,339	1,056	33	29	38	29	25	25	29	41
トルクメニスタン		5,962	32	29	30	51			38	20
新疆	5,803	17,941	35	19	31	43	25	30	35	38

資料：『新疆統計年鑑』04年版，44頁。鳥居泰彦翻訳監修『世界・経済統計』東洋書林，04年7月，190頁～192頁のデータを参考に作成。

注：新疆のGDPをドルに換算した。1990年の為替レート中間値，1ドル=4.7221RMB(人民幣)，2001年のレート中間値，1ドル=8.277RMB。『中国金融年鑑』91年版，94頁。2002年版，480頁。

業，特に製造業が弱い。ウズベキスタン，キルギス，タジキスタンの製造業は最も薄弱である。トルクメニスタンは工業水準が比較的高いが，サービス業が弱い。したがって，これらの国は多種の工業製品と日用品を外国に依存せざるを得ない。最近まで，カザフスタンが70%の日常製品，ウズベキスタンが60%の工業製品と50%の消費財，トルクメニスタンが50%以上の食料品と90%の軽工業製品を外国から輸入している。

新疆の工業水準はトルクメニスタンを除いて，他の4カ国より高いが，農業の割合が2桁で，工業化社会になっていない。1990年の工業構造における重工業，軽工業の割合がそれぞれ50.7%，49.3%であったが，2001年で，それが77.5%，22.5%となって，重工業傾斜で，産業構造が歪んでいる。新疆は食品加工，食品製造，飲料製造，紡績，服装，製紙などの業種の生産を併せると軽工業が工業総生産の18.5%を占め，中央アジア諸国より優位で，これらの製品を提供する能力を持っているといえども，軽工業の発展を重視して工業構造を是正しなければ，近いうちに新疆はこの優位性を失ってしまう。

三つ目は，自然環境問題の制約である。中央アジア地域はユーラシア大陸の真ん中に位置し，降水量が非常に少ないため，世界の中で最も乾燥した地域の一つである。人間の活動は大きく遊牧社会とオアシス社会に分かれる。特に，オアシス社会が砂漠の中や山麓に孤立して点在するため，水が生命線で，生態環境は非常に脆弱である。昔は，どちらの社会も，伝統的に形成された維持管理体制ができ，自然環境との持続可能な関係を維持してきた。しかし，現在は，水不足と水汚染，産業廃棄物，放射能汚染，土壌浸食・塩化，土壌汚染，砂漠化などの環境問題がこの地域に重くのしかかっている。これらの問題を解決しない限り，経済は発展しないばかりでなく，人間の住む環境さえ保障できない。

最後に，中央アジア地域は再び伝統的な大国のパワー・ゲームの舞台となっていくかが，懸念される。世界情勢は非常に不安定で，国際政治，経済，ないし貿易関係に大きく影響する。遅れている地域として，新疆と中央アジア諸国は競争の激しい国際経済の市場化，グローバル化の潮

流の中で、互いに協力し合って、この地域の優位性を発揮し、諸国間、特に先進国との間に、自然環境の保護から経済の発展と安全保障までの地域協力関係を構築しながら、持続可能な特色のある経済社会をつくりあげ、世界経済の中で不可欠な存在として自分の政治・経済社会の発展を図らなければならない。

中央アジア諸国の経済水準が、旧ソ連時代の水準にまで回復するのに、今後5年ないし10年を必要とするが、その間経済構造も是正され、自国の工業体系を形成し、その後、安定した発展軌道に乗ると思われる。新疆は中国沿海部より遅れているが、地下資源、農業資源、人文資源の比較優勢を持っている。自然環境を大事にしながら、農業、牧畜業、鉱物採掘業、交通運輸業、建築建材業、観光業の発展に力を入れ、先進の工業体系を構築し、バランスの取れた産業構造を形成すれば、10年の間に経済が一段と発展すると思われる。そのとき、中央アジア地域の経済において、新疆は最も大きな役割を果たすことができる。

ここ10数年、中央アジア諸国は困難を超え、生産を回復し、経済が危機を脱出し、安定発展段階に入った。21世紀に入り、新疆と中央アジア諸国との各分野で相互依存関係をさらに強め、双方の経済発展に大きなチャンスをもたらした。今は、人類の平和と安定、経済の協力と発展は世界の主流となっているが、この地域は政治の安定を維持できれば、今後も経済交流が一層進み、一つの新しい経済圏を形成しうるであろう。その意味では、この地域にとって、近隣諸国を含んだ政治、経済、安全保障、環境保護における地域協力体制の確立は不可欠である。

（注）本論は、2005年10月27日、韓国大田大学校「韓日 国際学術発表大会」で発表した論文を整理したものです。

参考文献

- (1) 江上波夫氏編『中央アジア史』、山川出版社、1990年12月。
- (2) 長沢和俊『シルクロード・幻の王国』、日本放送出版協会、昭和55年5月。
- (3) 間野英二・堀川徹『中央アジアの歴史・社会・文化』、放送大学教育振興会、2004年9月。
- (4) 山内昌之編集『中央アジアと湾岸諸国』、朝日選書、1995年4月。
- (5) 木村汎、石井明編『中央アジアの行方——米ロ中の綱引き』、勉誠出版、2003年12月。
- (6) 王沛主編『中亜四国概況』、新疆人民出版社、1993年、8月。
- (7) 白平治等主編『新疆対外経済貿易口岸』、新疆人民出版社、1992年、8月。
- (8) 王海燕「中亜五国与中国新疆経済合作的互補性分析」『東欧中亜市場研究』2002年第2期。
- (9) 劉甲金、蒲開夫「中亜市場与中亜国際商貿城」『新疆投資与建設』2001年6月。
- (10) 岩崎一郎等編集『現代中央アジア論』、日本評論社、2004年8月。
- (11) 岩崎一郎『中央アジア体制移行経済の制度分析』、東京大学出版会、2004年11月。
- (12) 橋田坦編集『中央アジア諸国の開発戦略』、勁草書房、2000年11月。
- (13) 劉彦群等『新疆対外貿易概論』、新疆人民出版社、1987年4月。
- (14) 北海道大学スラブ研究センター『ユーラシア国境政治——ロシア・中国・中央アジア——』研究書

No.8, 札幌 2005年7月。

(15) 宇山智彦『中央アジアを知るための60章』, 明石書店, 2005年2月。

(16) 宮田律『中央アジア資源戦略——石油・天然ガスをめぐる地経学』, 時事通信社, 1999年9月。